特集記事

2019年 新春トップセミナー

「神道と日本人の心」

春日大社宮司　花山院　弘匡 氏

講師の花山院　弘匡 氏

■神道の基本的な形

人間は自然の中で生かされている、自然の中から恵みを得て、それを食して、健康で幸せな時間をつむいでいく。それによってご先祖さまから命がつながっていて、祖父や祖母、父や母から私たちに命が与えられる。そしてそれが子や孫へつながっていく。それが自然の基盤の中で行われているということを守っていくというのが日本の神様の根本的なところとなります。ですから自然の破壊されたところでは、人間は生きていけない。自然を大切にしていく、守っていく。ということが日本の神様ということになります。

日本の神様は基本的に昔から社殿はなくて自然の美しいもの、例えば、神山、日本の美しい山に降りてこられたところがたくさんあります。春日大社も神山の三笠山から始まりました。

自然の中でシンボリックな自然を圧倒するような力を持っている岩に神様が降りてきて人々の生活を守るとなると磐座（いわくら）。岩が神様であるというのは、日本人は思っていません。神様が降りてきたシンボリックな岩だけが磐座となります。

森の中で樹齢が500年、1000年の大木で自然を代表するものだとそこに神様が降りてきてご神木となる。自然の中で我々を豊かにさせてくれるということから、そういうものに神様が降りられてくる。

春日大社の森も原生林として神様の森として昔からあり、日本中の神社にも鎮守の森がたくさんあります。

神棚にキラキラした榊という木を置く。ピカピカとしているということは自然の中で神様が力を発揮している。守っているとされています。神様のご加護をいただくために神棚に榊を置き小さな鎮守の森となります。これが神道の基本的な形となります

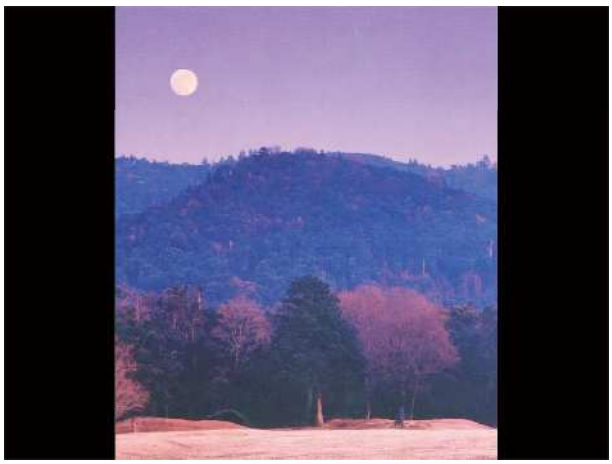
■神様のお山・三笠山

山が重なっているので晴れた日に写真を撮ると三笠山の形は全く見えない。雨が降ったあと雲海があると形がみえる。春日大社はこのきれいな円錐形の三笠山が神山で、710年に平城京がつくられ、三笠山が神様のお山で平城京を守られた。

三笠山から太陽があがる。地球の生きとし生けるものは太陽の光なしには生きていけない。平城京の人々にとって、神様のお山から太陽があがることは、生きていく上で重要なことである。

花山院　弘匡 氏　ご略歴

1962年、佐賀県生まれ。
1985年、國學院大文学部神道学科卒業。
奈良県立奈良高校などで地理を担当、2008年から春日大社宮司。
花山院家は藤原道長の孫で関白師実の二男家忠を祖に11世紀末に創立。五摂家に次ぐ九清華家の一つで旧侯爵家。
宮司は第33代目当主。
（現在に至る）



三笠山の上にあがる月。昼を支配する太陽。夜を支配する月。ともに神のお山からあがる。

有名な歌で

天の原　ふりさけ見れば　春日なる
三笠の山に　出でし月かも

大空を振り仰いで見ると、月が出ている。あの月は私の故郷、春日の三笠山に出ていた月と全く同じ月なのかなぁ。と詠まれた歌である。

平城京の人口は10万人で、この当時世界人口は4億人であったので、平城京は超巨大都市であった。三笠山はこの地域の水源地でもありました。昔の人は雨が降ると喜び、雨が降らないと井戸は枯れ、作物は育たない。現代の価値観と逆でした。先に話したように晴れているときには三笠山はみえず、雨が降り、雲海があると三笠山がみえる。平城京の人々にとって三笠山は神のお山と崇められるようになりました。

■春日大社

春日大社は768年に三笠山の尾根づたいに階段状に建てられました。神様の山を削らないことを最優先にしたため、御本殿や回廊が歪んで建てられております。春日大社は今年で1251年目になります。

春日大社の御本殿はほとんどの人が知りません。ほとんどの方がパンフレットの表紙にある建物だと思っていますが違います。この建物は御本殿の前にあります。538年に仏教が日本に伝わってきました。外国の神様として入ってきて、その後、神仏習合が進むに連れて、神は仏であり、仏は神であるということとなり、春日の神様にお経を読むと喜ぶということになり、お経を読むための建物として白河上皇がこの建物を建てられました。

■原生林が残る春日の森

三笠山・春日山は原生林で、日本の県庁所在地で原生林が残っているのは春日の森だけです。もっというと世界中の先進国でこれだけの規模の都市で原生林が残っているのは春日の森だけです。

イギリスには原生林はひとつも残っていません。昔は燃料が木でした。煮炊きや工業化するには木を伐って燃料にしました。更にイギリスは伐った場所を牧草地にしていったのでどんどん原生林がなくなっていきました。ヨーロッパで原生林が残っているのはドイツや北欧などのごく一部でしかなく、人口が増え産業が発展していくと木が伐られていきました。木がなくなると地下に燃える石があるので使おうということになり産業革命につながっていきました。

春日は1300年前に巨大都市だったのに神様のお山ということで木が伐られませんでした。841年には神山として狩猟伐採が禁じられ原生林が守られて

いくことになります。天皇陛下もここの木が枯れると神様が出ていかれると考え守られてきました。

世界中でも稀有で世界遺産にも登録されています。奈良に来た外国人は原生林とシカ・動物と人間が共生している理想郷としてみており、外国人は奈良公園をDeer Parkと呼び、奈良公園に行きたがります。自然の環境ということに対して外国の人はすごいシンパシーを感じています。

■神道

神様のお力で豊かな自然が人々を幸せにするということが神道の根本的な考え方のひとつです。人間にとって大切なものは命でありますが、生まれてこようと思って生まれてきた人はいない。死ぬということも自分ではどうしようも出来ない。人間にはどうしようも出来ない人知を超えたものである。人は神様に畏れがある。神様が怖いというのは人知を超えた存在であるからで、またそういったものが日本の神様となります。与えられた命を神様が自然の中で実りを与えてくれ健康で幸せな時間を与えてくれ、命がつながっていくというサイクルを与えてくれる。

■神道と宗教

日本に宗教という言葉はありませんでした。明治になって初めて外国から入ってきました。それまでは宗派という言葉はありましたが宗教はありませんでした。宗教というのはキリスト教の概念です。そういうことから神道は宗教なのかという質問がよくあります。宗教とは本来は創始者がいる。イエスであったり、釈迦であったり、ムハンマドであったり、そうした人が創始し、教理や教典があります。神道には何もありません。

人間の生死、人間の心の持ちよう、人間の生き方というのが宗教で、神道は基本的には自然に関わるものですから、宗教とは少し離れています。

ただ1000年間神仏習合でした。神仏習合のときは、神は仏であり、仏は神である。これが日本文化の基本なので、やおよろずの神がたくさんいる中に、すばらしい人が来たという感じです。日本に宗教戦争が起こらないというのはこういったところから来ています。

■新嘗祭収穫祭

天皇陛下が1000年以上行っている一番のお祭りは新嘗祭です。新嘗祭は自然の中から最も大切な命を守る実りを得たことを感謝する祭りであり、同時に地震や水害などの災害のない環境を守っていくという祈りであります。

今話題になっている大嘗祭というのは、天皇陛下が一生に一度だけ出来る大掛かりな新嘗祭のことであります。これが11月14、15日に行われます。

神様と一緒に感謝をし、供えて、一緒に食事をします。これは各神社でも行います。昔は村でも行いました。もっと言えば家でも行いました。今でも新嘗祭を行う家庭がたくさんあって文化財に指定されています。天皇陛下が行い、個人でも行っていました。

■神仏習合

神道は仏教が入ってきて大きく変わりました。神仏習合が進んでいきました。今でも神社にご利益（ごりやく）という言葉がありますが、ご利益は仏教用語です。日本の神道も仏教の影響を受けた。日本の仏教は神道の影響を受けた仏教となっています。

春日大社でいうと本来は自然の中で実りを守るということですが、武神や知恵、交通安全、縁結びなどは、本来はありませんでした。

神仏習合が進み、神道と仏教が一つとなり日本の文化をつくってきました。ただ神道は、人間は自然の中で生かされているということが基本的なところとなっています。